

---

## 原 著

---

### 子育てをする父親の育児不安の実態と背景要因の探索

日野 紗穂<sup>1)</sup>, 葉久 真理<sup>2)</sup>, 近藤 彩<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>愛媛県立中央病院

<sup>2)</sup>徳島大学大学院医歯薬学研究部

(令和3年11月9日受付) (令和3年12月2日受理)

本研究では、子育てをする父親の育児不安の実態と背景要因を探索した。生後1ヵ月を過ぎた子どもの子育てをする父親87名を対象に、子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版、夫婦関係満足度尺度および独自に作成した質問紙を用いて調査した。その結果、本尺度が定めた各領域別のハイリスクな状態にある者の割合は、領域Ⅰ17.2%、領域Ⅱ8.0%、領域Ⅲ4.6%、領域Ⅳ6.9%であった。育児不安の背景要因は、ハイリスク群はそれ以外の群より、家事・育児時間が短く、夫婦関係満足度が低かった。社会環境が激変する中において、父親の産後うつや子ども虐待などの社会的課題は解決の糸口がみえてこない。育児をする父親の現状は、まだ十分明らかにされておらず、父親育児に特化した尺度も見当たらない。本調査結果を踏まえて、父親の心理的体験を把握し、父親育児を身体的・精神的・社会的側面から捉えることのできる尺度開発が求められる。

日本における子育ての実情は、6歳未満の子を持つ夫婦における家事・育児関連時間が示すように、妻が7時間34分(うち育児時間3時間45分)に対して、夫は1時間23分(うち育児時間49分)<sup>1)</sup>と、母親となった女性が主に担っている状況にある。一方、男性の労働時間は、7時間32分と他の先進諸国に比べて長く<sup>2)</sup>、子どもを持つ男性の中には、家庭での短い時間の中で、家事や育児に取り組んでいることが推察される。

国では、『男女雇用機会均等法(1985)』や『育児・介護休業法(1991)』、『次世代育成支援対策推進法(2005)』など法を整備し、仕事と家庭の両立支援策を充実させ、

社会的・経済的・心理的側面から子育てを支援している。さらに、子育てをする女性の重要なサポートパーソンとしての男性を、これまでの単にサポートする役割という「育児参加」という視点ではなく、男性が子育ての責任を認識しながら主体的に役割を果たしていくという「育児参画」を促進するために、イクメンプロジェクトや、さんきゅうパパプロジェクトなどを発足させ、21世紀の国民運動計画である健やか親子21(第1次)、それに続く第2次においても、積極的に育児をしている父親の割合を増加させることを目標として取り組んでいる。その結果、積極的に育児をしている父親の割合は増加傾向にある<sup>3)</sup>。その一方で、今後育児疲れや育児不安に陥る父親が増えてくる可能性がある<sup>4)</sup>ことが示唆され、現在、父親となった男性の「産後うつ」が社会的課題となっている。これまでの調査では、父親の産後うつのリスクファクターや、産後うつによる養育行動への影響<sup>5,6)</sup>も報告されているが、十分な結果が得られていない現状にある。さらに、児童虐待相談対応件数は年々増加しており、児童虐待相談における主な虐待構成割合では、実父は増加傾向にあり、実母とほぼ同じ割合を占め<sup>7)</sup>、男女問わず子育てしにくい社会となっていることが伺える。この子ども虐待は、身体的、精神的、社会的、経済的などの要因が複雑に絡み合って起こると考えられており、危機状況の家族や育児困難を感じている親子を見極めるための目安となるリスク要因として、保護者側の要因、子どもの要因、養育環境をとりまく要因に大きく分類<sup>8)</sup>され、予防啓発、支援が展開されている。保護者側の要因では、育児に対する不安やストレスがあり、父親となっ

た男性は、仕事とこれまで関わる事が少なかった家事・育児との両立において、育児に対する困難感や不安、ストレスを感じることからメンタル不調に陥ったり、メンタルの不調があるために困難感や不安、ストレスを感じたりと、母親の調査結果と同様の状況にあると推察される。しかし、育児をする父親が抱える課題は、社会の大きな変化の中で未だ十分に捉えられていない。

そこで本研究では、父親の育児不安の発生要因を評価することのできる質問紙を用いて、子育てをする父親の育児不安の実態と背景要因を探索することとした。

本調査結果は、少子化や児童虐待、育児期のメンタルヘルスなどの課題解決に向けて、育児不安に陥る父親への支援を検討するための一助になると考える。

## I. 研究方法

### 1. 対象と調査方法

対象者は、地方都市にある第3次医療施設で出産した妻と婚姻関係にある夫である。対象者は、20歳以上の者で身体的精神的に健康である者、毎日子どもと関わっている者、対象者の妻と子はともに健康であることとした。

妻の産後1ヵ月健診に同伴された父親に、無記名自記式質問紙調査を実施した。対象者への同意取得には、研究者が、口頭と文書にて研究の説明を行い、同意が得られた者に質問紙を手渡しにて配布した。質問紙の回収は留め置き法にて行い、一部郵送による返信とした。調査期間は2016年4月から12月であった。

### 2. 調査内容

#### 1) 対象者の属性

対象者の属性は、年齢、子どもの数、1日の平均勤務時間、1日の平均家事時間、1日の平均育児時間とした。また、育児の時間が持てているかどうか、育児費用の負担が大きいかどうかについての回答を「全くそう思わない：1」から「とてもそう思う：4」の4段階リッカート尺度にて調査した。得点が高いほど、育児への時間が持てない、育児費用の負担が大きいことを示す。

#### 2) 夫婦関係満足度尺度 (QMI)

夫婦関係満足度尺度は、Norton<sup>9)</sup>が開発し、諸井<sup>10)</sup>により邦訳されている尺度である。夫婦関係満足度尺度は、夫婦の関係全体の良さを反映する6項目で構成され、「かなりあてはまる：4」から「ほとんどあてはまらない：1」の4段階リッカート尺度である。得点が高いほど夫婦関係に満足していることを示す。信頼性 ( $\alpha = 0.927$ ) は検証されている。

#### 3) 子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版

子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版 (以下、父親育児スクリーニングとする) は、安藤らが開発<sup>11)</sup>した0歳から7歳未満児を持つ父親の育児不安の発生要因を評価することのできる質問紙である。本来、保健指導時などにおいて、スクリーニングする目的で使用されるが、研究で利用する場合に事後の面接ができないならば、無記名の一般的なアンケートの位置付けで実施したほうが良いと記されており、開発者に研究の目的等を連絡し、使用許諾を得て実施した。

本質問紙は、領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ (育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」)」5項目、領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ (子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」)」5項目、領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」5項目、領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」5項目、領域Ⅴ2項目の5領域で構成されている。評定は、「はい：4」から「いいえ：1」の4段階リッカート尺度で、領域ごとに得点化し得点が高いほど育児不安が高いことを示す。但し、領域Ⅴは点数化しないこととなっている。

本質問紙は、各領域でハイリスクな状態にあると考えられて良いとされる (以下、ハイリスク群とする) 基準点が示されており、領域Ⅰは14点以上、領域Ⅱは11点以上、領域Ⅲは14点以上、領域Ⅳは13点以上である。信頼性 (領域Ⅰ  $\alpha = 0.859$ , 領域Ⅱ  $\alpha = 0.736$ , 領域Ⅲ  $\alpha = 0.908$ , 領域Ⅳ  $\alpha = 0.803$ ) は検証されている。

#### 4) データ分析方法

基本属性・各尺度得点は、単純集計し記述統計量を算

出した。2群間における比較には、Mann-Whitney検定を行った。なお、分析にはSPSS version 22.0 for Windowsを用いた。

5) 倫理的配慮

研究への協力は、対象者の自由意思に基づくものであること、同意しないことで不利益な扱いを受けないこと、調査によって知り得たことは、本研究以外には使用しないことを保証した。調査結果の公表においては、統計的に処理をするため、個人が特定されることはないことを担保した。なお、本研究は、調査施設の臨床研究倫理審査委員会の承認 (No. 2509) を得て実施した。

II. 結果

1. 対象者の属性と夫婦関係満足度尺度得点 (表1)

質問紙は143名に配布し、95名から回答を得た。このうち、無効回答があるものを除き、有効回答は87名 (有効回答率60.8%) であった。

対象者の平均年齢は36.1±6.2歳であった。

養育している子どもの数は、子ども1名が37名 (42.5%)、2名が40名 (46.0%)、3名以上が10名 (11.5%) で、子どもを1名養育している対象者 (以下、子1人群) の平均年齢は35.5±7.6歳、子どもを2名以上持つ対象者 (以下、子2人以上群) の平均年齢は36.4±4.9歳であった。

対象者の夫婦関係満足度の平均得点は、20.7±2.7点で、子1人群は21.4±2.4点、子2人以上群は20.2±2.8点であった。子1人群と子2人以上群に、有意な差 (p = 0.038, p < 0.05) が認められた。(表2)

表1 対象者の属性

	対象者全体	子1人群	子2人以上群
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
人数	87	37(42.5%)	50(57.5%)
年齢	36.1(6.2)	35.5(7.6)	36.4(4.9)
1日の平均勤務時間 (時間)	9.3(1.7)	9.2(1.4)	9.4(1.8)
1日の平均家事時間 (分)	53.8(54.1)	52.2(52.1)	55.0(56.0)
1日の平均育児時間 (分)	99.0(68.9)	101.9(67.6)	96.8(70.5)
育児への時間が持てない (1~4点)	2.5(0.8)	2.4(0.9)	2.6(0.8)
育児費用の負担が大きい (1~4点)	2.5(0.9)	2.4(0.8)	2.7(0.9)
夫婦関係満足度	20.7(2.7)	21.4(2.4)	20.2(2.8)

表2 子どもの数別にみた対象者属性の比較 (N=87)

	子1人群 (n=37)	子2人以上群 (n=50)	P 値
	中央値(四分位範囲)	中央値(四分位範囲)	
年齢	35.0(30.0~38.0)	36.5(32.8~40.0)	0.215
1日の平均勤務時間 (時間)	9.0(8.0~10.0)	9.0(8.0~10.25)	0.951
1日の平均家事時間 (分)	60.0(7.5~60.0)	60.0(27.5~60.0)	0.75
1日の平均育児時間 (分)	60.0(60.0~120.0)	60.0(60.0~120.0)	0.628
育児への時間が持てない	2.0(2.0~3.0)	3.0(2.0~3.0)	0.231
育児費用の負担が大きい	2.0(2.0~3.0)	3.0(2.0~3.0)	0.141
夫婦関係満足度	22.0(19.0~24.0)	20.0(18.0~23.0)	0.038*

Mann-Whitney 検定

\*p<0.05

## 2. 父親育児スクリーニング得点

対象者の父親育児スクリーニングの領域別の平均得点は、領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ（育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感）」が10.2±3.4点、領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ（子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性）」が6.5±2.2点、領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」が7.0±3.2点、領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」は8.9±2.8点であった。（表3）

## 1) 子どもの数別にみた父親育児スクリーニングの領域別の平均得点

子どもの数別にみた父親育児スクリーニングの領域別の平均得点は、子1人群では、領域Ⅰは9.7±3.3点、領域Ⅱは5.6±1.3点、領域Ⅲは6.2±2.2点、領域Ⅳは8.6±2.3点であった。

子2人以上群では、領域Ⅰは10.5±3.5点、領域Ⅱは7.2±2.5点、領域Ⅲは7.6±3.7点、領域Ⅳは9.2±3.1点であった。（表3）

子2人以上群は子1人群に比べて、領域Ⅱ「育児困難

表3 父親育児スクリーニング得点

	対象者全体 (N=87)	子1人群	子2人以上群
		(n=37)	(n=50)
	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)
領域Ⅰ 育児困難感タイプⅠ	10.2(3.4)	9.7(3.3)	10.5(3.5)
領域Ⅱ 育児困難感タイプⅡ	6.5(2.2)	5.6(1.3)	7.2(2.5)
領域Ⅲ 父親自身の不安・抑うつ状態	7.0(3.2)	6.2(2.2)	7.6(3.7)
領域Ⅳ 夫婦関係のあり方	8.9(2.8)	8.6(2.3)	9.2(3.1)

表4 子どもの数別の父親育児スクリーニング得点の比較 (N=87)

		子1人群	子2人以上群	P値
		(n=37)	(n=50)	
		中央値(四分位範囲)	中央値(四分位範囲)	
領域Ⅰ	育児困難感タイプⅠ	10.0(6.0~12.0)	10.0(7.8~13.0)	0.386
領域Ⅱ	育児困難感タイプⅡ	5.0(5.0~5.5)	7.0(5.0~8.0)	0.000*
領域Ⅲ	父親自身の不安・抑うつ状態	5.0(5.0~6.0)	5.0(5.0~10.0)	0.115
領域Ⅳ	夫婦関係のあり方	9.0(7.0~10.0)	9.0(6.8~11.0)	0.352

Mann-Whitney 検定

\*p<0.05

表5 父親育児スクリーニング領域別のハイリスク群の人数と平均得点

		ハイリスク群全体		子1人群における ハイリスク群		子2人以上群における ハイリスク群	
		人数 (%)	平均 (SD)	人数 (%)	平均 (SD)	人数 (%)	平均 (SD)
領域Ⅰ	育児困難感タイプⅠ	15(17.2)	15.5(1.7)	5(13.5)	14.8(0.8)	10(20.0)	15.8(1.9)
領域Ⅱ	育児困難感タイプⅡ	7(8.0)	12.1(0.9)	0(0)		7(14.0)	12.1(0.9)
領域Ⅲ	父親自身の不安・抑うつ状態	4(4.6)	16.3(2.6)	0(0)		4(8.0)	16.3(2.6)
領域Ⅳ	夫婦関係のあり方	6(6.9)	14.5(2.8)	1(2.7)	13.0	5(10.0)	14.8(3.0)

感タイプII (子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」)の得点が有意 ( $p=0.000$ ) に高かった。(表4)

## 2) 父親育児スクリーニング領域別のハイリスク群の人数と平均得点 (表5)

各領域別のハイリスクな状態にあると考えて良いとされる基準点を超えるハイリスク群は、領域I「育児困難感タイプI (育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」) (基準点14点以上) は15名 (17.2%) で、平均得点は $15.5 \pm 1.7$ 点、領域II「育児困難感タイプII (子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」) (基準点11点以上) は7名 (8.0%) で、平均得点は $12.1 \pm 0.9$ 点、領域III「父親自身の不安・抑うつ状態」 (基準点14点以上) は4名 (4.6%) で、平均得点は $16.3 \pm 2.6$ 点、領域IV「夫婦関係のあり方」 (基準点13点以上) は6名 (6.9%) で、 $14.5 \pm 2.8$ 点であった。

そのうち、領域Iと領域IIともに基準点を超えているものは5名、領域IIIと領域IVともに基準点を超えているものは1名であり、領域Iから領域IVすべてにおいて基準点を超えているものは1名であった。

子1人群におけるハイリスク群は、領域Iは5名 (13.5%) で、平均得点は $14.8 \pm 0.8$ 点、領域IIと領域IIIは0名、領域IVは1名 (2.7%) で、平均得点は13.0点であった。領域Iと領域IIともに基準点を超えているもの、領域IIIと領域IVともに基準点を超えているものはいなかった。

子2人以上群におけるハイリスク群は、領域Iは10名 (20.0%) で、平均得点は $15.8 \pm 1.9$ 点、領域IIは7名 (14.0%) で、平均得点は $12.1 \pm 0.9$ 点、領域IIIは4名 (8.0%) で、平均得点は $16.3 \pm 2.6$ 点、領域IVは5名 (10.0%) で、 $14.8 \pm 3.0$ 点であった。

領域Iと領域IIともに基準点を超えているものは5名、領域IIIと領域IVともに基準点を超えているものは1名であり、領域Iから領域IVすべてにおいて基準点を超えているものは1名であった。

## 3. 父親育児スクリーニングの領域別にみた高得点項目 (表6)

対象者全体では、領域I「育児困難感タイプI (育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」)の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「どのようにしついたらよいかわからない」は42名 (48.3%)、「子どものことでどうしたらよいかわからない」は32名 (36.8%)、「育児に自信が持てない」は23名 (26.4%)、「子育てに困難を感じる」は20名 (23.0%)、「父親として不適格と感じる」は18名 (20.7%) であった。

領域II「育児困難感タイプII (子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」)の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む」は11名 (12.6%)、「とめどなく叱ってしまう」は9名 (10.3%)、「子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう」は7名 (8.0%)、「子どもを虐待しているのではないかと思う」は2名 (2.3%)、「子どものことを許せない」は該当者なしであった。

領域III「父親自身の不安・抑うつ状態」の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「気が滅入る」は13名 (14.9%)、「悲観的になりやすい」は10名 (11.5%)、「不安や恐怖感におそわれる」は9名 (10.3%)、「精神的に不調である」は6名 (6.9%)、「沈みがち」は4名 (4.6%) であった。

領域IV「夫婦関係のあり方」の各項目で「やよいいえ」「いいえ」と回答した者は、「妻が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴く」は23名 (26.4%)、「妻と気持ちを通じ合っている」は10名 (11.5%)、「男として家族を守り支えとなっている」は9名 (10.3%)、「妻が子育てに悩んでいるときには精神的に支えるようにしている」は6名 (6.9%)、「家族としてのまとまりを感じる」は3名 (3.4%) であった。

## 1) ハイリスク群における父親育児スクリーニングの領域別にみた高得点項目 (表6)

ハイリスク群全体では、領域I「育児困難感タイプI」の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「どのようにしついたらよいかわからない」は15名 (100%)、

表6 父親育児スクリーニングの領域別にみた高得点項目

質問項目	対象者全体 (N=87)		ハイリスク群全体		ハイリスク群における 子1人群		ハイリスク群における 子2人以上群	
	「はい」/ 「ややはい」 人数(%)	「ややいいえ」/ 「いいえ」 人数(%)	「はい」/ 「ややはい」 人数(%)	「ややいいえ」/ 「いいえ」 人数(%)	「はい」/ 「ややはい」 人数(%)	「ややいいえ」/ 「いいえ」 人数(%)	「はい」/ 「ややはい」 人数(%)	「ややいいえ」/ 「いいえ」 人数(%)
領域I 育児困難感タイプI 子どものことでどうしたらよいかわからない 育児に自信が持てない どのようにしついたらよいかわからない 子育てに困難を感じる 父親として不適格と感じる	32(36.8) 23(26.4) 42(48.3) 20(23.0) 18(20.7)	55(63.2) 64(73.6) 45(51.7) 67(77.0) 69(79.3)	15(100) 14(93.3) 15(100) 13(86.7) 10(66.7)	(n=15) 0(0) 1(6.7) 0(0) 2(13.3) 5(33.3)	5(100) 5(100) 5(100) 5(100) 0(0)	(n=5) 0(0) 0(0) 0(0) 5(100)	10(100) 9(90.0) 10(100) 8(80.0) 10(100)	(n=10) 0(0) 1(10.0) 0(0) 2(20.0) 0(0)
領域II 育児困難感タイプII とめなく叱ってしまう 子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう 子どもにも八つ当たりしては反省して落ち込む 子どものことを許せない 子どもを虐待しているのではないかと思う	9(10.3) 7(8.0) 11(12.6) 0(0) 2(2.3)	78(89.7) 80(92.0) 76(87.4) 87(100) 85(97.7)	5(71.4) 7(100) 6(85.7) 0(0) 2(28.6)	(n=7) 2(28.6) 0(0) 1(14.3) 7(100) 5(71.4)	0(0) 0(0) 0(0) 0(0) 0(0)	(n=0) 0(0) 0(0) 0(0) 0(0)	5(71.4) 7(100) 6(85.7) 0(0) 2(28.6)	(n=7) 2(28.6) 0(0) 1(14.3) 7(100) 5(71.4)
領域III 父親自身の不安・抑うつ状態 精神的に不調である 沈みがち 不安や恐怖感におそわれる 悲観的になりやすい 気が滅入る	6(6.9) 4(4.6) 9(10.3) 10(11.5) 13(14.9)	81(93.1) 83(95.4) 78(89.7) 77(88.5) 74(85.1)	4(100) 3(75.0) 4(100) 3(75.0) 4(100)	(n=4) 0(0) 1(25.0) 0(0) 0(0)	0(0) 0(0) 0(0) 0(0) 0(0)	(n=0) 0(0) 0(0) 0(0) 0(0)	4(100) 3(75.0) 4(100) 3(75.0) 4(100)	(n=4) 0(0) 1(25.0) 0(0) 1(25.0) 0(0)
領域IV 夫婦関係のあり方 妻と気持ち合っていない 家族としてのまとまりを感じる 妻が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴く 妻が子育てに悩んでいるときには精神的に支えるようにしている 男として家族を守り支えとなっている	77(88.5) 84(96.6) 64(73.6) 81(93.1) 78(89.7)	10(11.5) 3(3.4) 23(26.4) 6(6.9) 9(10.3)	1(16.7) 3(50.0) 0(0) 1(16.7) 3(50.0)	(n=6) 5(83.3) 3(50.0) 6(100) 5(83.3) 3(50.0)	0(0) 1(100) 0(0) 0(0) 1(100)	(n=1) 1(100) 0(0) 1(100) 1(100) 0(0)	1(20.0) 2(40.0) 0(0) 1(20.0) 2(40.0)	(n=5) 4(80.0) 3(60.0) 5(100) 4(80.0) 3(60.0)

「子どものことでどうしたらよいかわからない」は15名(100%)、「育児に自信が持てない」は14名(93.3%)、「子育てに困難を感じる」は13名(86.7%)、「父親として不適格と感じる」は10名(66.7%)であった。

領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ」の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう」は7名(100%)、「子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む」は6名(85.7%)、「とめどなく叱ってしまう」は5名(71.4%)、「子どもを虐待しているのではないかと思う」は2名(28.6%)、「子どものことを許せない」は該当者なしであった。

領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「精神的に不調である」は4名(100%)、「不安や恐怖感におそわれる」は4名(100%)、「気が滅入る」は4名(100%)、「沈みがち」は3名(75.0%)、「悲観的になりやすい」は3名(75.0%)であった。

領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」の各項目で「ややいいえ」「いいえ」と回答した者は、「妻が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴く」は6名(100%)、「妻と気持ちが通じ合っている」は5名(83.3%)、「妻が子育てに悩んでいるときには精神的に支えるようにしている」は5名(83.3%)、「家族としてのまとまりを感じる」は3名(50%)、「男として家族を守り支えとなっている」は3名(50.0%)であった。

## 2) ハイリスク群における子ども数別にみた高得点項目(表6)

子1人群では、領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ」の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「どのようにしついたらよいかわからない」、「子どものことでどうしたらよいかわからない」、「育児に自信が持てない」、「子育てに困難を感じる」はともに5名(100%)、「父親として不適格と感じる」は該当者なしであった。

領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ」と領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」は該当者なしであった。

領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」の各項目で「ややいいえ」「いいえ」と回答した者は、「妻が落ち込んだ時に話し

相手になり、話をよく聴く」、「妻と気持ちが通じ合っている」、「妻が子育てに悩んでいるときには精神的に支えるようにしている」はともに1名(100%)、「家族としてのまとまりを感じる」、「男として家族を守り支えとなっている」はともに該当者なしであった。

子2人以上群では、領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ」の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「どのようにしついたらよいかわからない」、「子どものことでどうしたらよいかわからない」、「父親として不適格と感じる」はともに10名(100%)、「育児に自信が持てない」は9名(90%)、「子育てに困難を感じる」は8名(80%)であった。

領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ」の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう」は7名(100%)、「子どもに八つ当たりしては反省して落ち込む」は6名(85.7%)、「とめどなく叱ってしまう」は5名(71.4%)、「子どもを虐待しているのではないかと思う」は2名(28.6%)、「子どものことを許せない」は、該当者なしであった。

領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」の各項目で「はい」「ややはい」と回答した者は、「精神的に不調である」、「不安や恐怖感におそわれる」、「気が滅入る」はともに4名(100%)、「沈みがち」、「悲観的になりやすい」はともに3名(75.0%)であった。

領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」の各項目で「ややいいえ」「いいえ」と回答した者は、「妻が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴く」は5名(100%)、「妻と気持ちが通じ合っている」、「妻が子育てに悩んでいるときには精神的に支えるようにしている」はともに4名(80%)、「家族としてのまとまりを感じる」、「男として家族を守り支えとなっている」はともに3名(60%)であった。

## 4. ハイリスク群と基本属性との関連(表7)

対象者において、ハイリスク群とそれ以外の群における父親育児スクリーニング得点と基本属性との関連では、以下の領域で有意差が認められた。

領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ(育児への「自信のなさ・

表7 ハイリスク群と基本属性との関連 (N=87)

	領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ」		P 値
	ハイリスク群 (n=15)	それ以外の群 (n=72)	
	中央値(四分位範囲)	中央値(四分位範囲)	
年齢	33.0(29.0~39.0)	37.0(32.25~40.0)	0.110
子どもの数	2.0(1.0~2.0)	2.0(1.0~2.0)	0.465
1日の平均勤務時間(時間)	9.0(8.0~10.0)	9.0(8.0~10.0)	0.982
1日の平均家事時間(分)	60.0(0.0~60.0)	60.0(16.25~60.0)	0.581
1日の平均育児時間(分)	60.0(30.0~120.0)	75(60.0~120.0)	0.053
育児への時間が持てない	3.0(3.0~3.0)	2.0(2.0~3.0)	0.017*
育児費用の負担が大きい	3.0(2.0~3.0)	2.5(2.0~3.0)	0.255
夫婦関係満足度	19.0(18.0~21.0)	21.0(18.25~24.0)	0.016*
	領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ」		
	ハイリスク群 (n=7)	それ以外の群 (n=80)	P 値
	中央値(四分位範囲)	中央値(四分位範囲)	
年齢	39.0(33.0~40.0)	36.0(32.0~39.75)	0.277
子どもの数	2.0(2.0~2.0)	2.0(1.0~2.0)	0.041*
1日の平均勤務時間(時間)	8.5(7.0~10.0)	9.0(8.0~10.0)	0.220
1日の平均家事時間(分)	0.0(0.0~60.0)	60.0(30.0~60.0)	0.224
1日の平均育児時間(分)	30.0(10.0~60.0)	60.0(60.0~120.0)	0.024*
育児への時間が持てない	3.0(2.0~3.0)	2.5(2.0~3.0)	0.220
育児費用の負担が大きい	3.0(3.0~4.0)	2.0(2.0~3.0)	0.059
夫婦関係満足度	20.0(14.0~24.0)	21.0(18.0~23.0)	0.350
	領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」		
	ハイリスク群 (n=4)	それ以外の群 (n=83)	P 値
	中央値(四分位範囲)	中央値(四分位範囲)	
年齢	38.0(31.5~43.0)	36.0(32.0~39.0)	0.524
子どもの数	2.0(2.0~2.75)	2.0(1.0~2.0)	0.114
1日の平均勤務時間(時間)	8.5(8.0~11.25)	9.0(8.0~10.0)	0.899
1日の平均家事時間(分)	45.0(7.5~105.0)	60.0(15.0~60.0)	1.000
1日の平均育児時間(分)	105.0(22.5~120.0)	60.0(60.0~120.0)	0.961
育児への時間が持てない	3.0(2.25~3.0)	3.0(2.0~3.0)	0.512
育児費用の負担が大きい	3.5(2.25~4.0)	3.0(2.0~3.0)	0.152
夫婦関係満足度	18.0(13.5~18.75)	21.0(18.0~24.0)	0.015*
	領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」		
	ハイリスク群 (n=6)	それ以外の群 (n=81)	P 値
	中央値(四分位範囲)	中央値(四分位範囲)	
年齢	30.0(25.5~34.75)	37.0(32.0~40.0)	0.025*
子どもの数	2.0(1.75~2.0)	2.0(1.0~2.0)	0.443
1日の平均勤務時間(時間)	9.0(8.0~11.0)	9.0(8.0~10.0)	0.776
1日の平均家事時間(分)	0.0(0.0~37.5)	60.0(30.0~60.0)	0.014*
1日の平均育児時間(分)	45.0(7.5~195.0)	60.0(60.0~120.0)	0.290
育児への時間が持てない	3.0(1.75~3.25)	3.0(2.0~3.0)	0.525
育児費用の負担が大きい	2.5(1.75~4.0)	3.0(2.0~3.0)	0.771
夫婦関係満足度	18.0(13.5~19.5)	21.0(18.5~24.0)	0.008*

Mann-Whitney 検定

\*p&lt;0.05



心配・困惑・父親としての不適格感)」におけるハイリスク群は、それ以外の群に比べて「育児への時間が持てない」が有意に高く ( $p=0.017$ ,  $p<0.05$ )、「夫婦関係満足度」が有意に低かった ( $p=0.016$ ,  $p<0.05$ )。

領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ (子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性)」におけるハイリスク群は、それ以外の群に比べて「子どもの数」が有意に多く ( $p=0.041$ ,  $p<0.05$ )、「1日の平均育児時間」が有意に低かった ( $p=0.024$ ,  $p<0.05$ )。

領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」におけるハイリスク群は、それ以外の群に比べて「夫婦関係満足度」が有意に低かった ( $p=0.015$ ,  $p<0.05$ )。

領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」におけるハイリスク群は、それ以外の群に比べて「年齢」「1日の平均家事時間」「夫婦関係満足度」が有意に低かった ( $p=0.008\sim 0.025$ ,  $p<0.05$ )。

### Ⅲ. 考察

#### 1. 対象者の特性

本調査対象者は、6歳未満の子を持つ夫婦における家事・育児関連時間と比較して、家事・育児に費やす時間が長かった。対象者の平均年齢は、 $36.1\pm 6.2$ 歳で、子ども1人の父親の年齢においても、 $35.5\pm 7.6$ 歳と、年齢の高い集団であった。女性の平均初婚年齢は上昇傾向にあり、晩婚化・晩産化が進行する中、男性も同様に父親となる年齢が上昇している。急速な少子高齢社会の中で、雇用者に占める女性の割合は45.3%と年々上昇し、独身女性の増加という一因もあるが、出産や子育てで離職するいわゆるM字カーブの底は浅くなってきている<sup>12)</sup>。この共働き世帯における子育てでは、男性の家事・育児参画への期待がこれまで以上に高まっていると言えよう。この男性の家事・育児参画には、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担意識の影響が示唆されているが、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」との考え方は、「賛成」が35.0%と過去最少の割合となり、「反対」は59.8%と過去最多となり、意識に変化が見られ始めている。一方、「賛成」とする理由では、「妻が家庭を守る方が、子どもの成長などに良い (55.2%)」が

最も多く、次に「両立しながら、妻が働き続けることは大変 (44.7%)」<sup>13)</sup>と、男性が家事・育児を行うことの有益性が未だ十分理解されていないことを示唆している。さらに、週労働時間が60時間以上の男性就業者の割合は、30歳代、40歳代が高く<sup>14)</sup>、父親となった男性が仕事と子育ての間で疲労やストレスを蓄積し、メンタルヘルスの問題を抱えているのではないかと推察される。これまで、産後のメンタルヘルスの問題は、主に出産後1年の期間にある女性に焦点が当てられ、産後のホルモン環境の変調をはじめ育児不安や育児ストレス、育児困難感との関連から多数調査されてきた。特に、東京都23区における異常死89例中自殺が63例確認され、この自殺の原因の6割が産後うつ病をはじめとする精神疾患であったことから、妊産婦メンタルヘルスケアの重要性が示され、産後2週間健診をはじめとした公的な取り組みが開始された。一方、日本人男性の周産期うつ病の有病率は妻の出産前8.5%、産後1ヵ月以内9.7%、1~3ヵ月8.6%、3~6ヵ月13.2%、6~12ヵ月8.2%<sup>16)</sup>との報告がある。育児が始まって半年頃の有病率が高いことから、妻の周産期における男性のメンタルヘルスにも着目し、両親ともにメンタルヘルスの課題を抱えてしまわないように、男性の仕事と家事・育児との関連調査が必要である。

また、夫婦関係満足度の得点は、6点~24点の範囲にあり、本調査対象者の平均得点は、 $20.7\pm 2.7$ 点であった。1歳6ヵ月児を育てる父親を対象とした調査では、妻の平均得点は $19.5\pm 3.5$ 点、夫 $20.5\pm 3.1$ 点<sup>17)</sup>で、本調査対象者の夫婦関係満足度が極端に高いあるいは低いというような特徴は有していないと判断した。さらに、子1人群と子2人以上群で有意な差が認められた。妊娠期は夫婦ともに74.3%が「本当に相手を愛していると実感する」と答えているが、妻は、子どもが生まれた0歳児期になると45.5%と急激に落ち込み、さらに子どもが2歳児期になると34.0%と落ち込む。また夫も、子どもが2歳児期になると51.7%と減少する<sup>18)</sup>。夫婦関係は、夫婦のメンタルヘルスに影響し、子どもの発達にも影響することから、父親育児の現状を理解する上で重要な背景要因になると考える。父親育児スクリーニングにおいて

も、領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」として独立して質問項目が設定されている。

## 2. 父親育児スクリーニング得点からみた育児不安の実態と発生要因

本調査対象者の父親育児スクリーニング得点は、領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ（育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」）、領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」、領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」、領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ（子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」）」の順に高かった。本得点は、5点～20点の範囲にあり、平均得点が最も高い領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ」では、 $10.2 \pm 3.4$ 点で、父親の育児に対する不確実性や戸惑いが推察される。また、父親育児スクリーニング得点は、子2人以上群が子1人群中に比べて、領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ（子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」）」の得点が有意に高かった。本父親育児スクリーニング調査と類似の子ども総研式育児支援質問紙による母親を対象とした育児困難感の先行研究では、育児困難感と出生順位に関連はなかった<sup>19)</sup>との結果が出されている。他の調査では、初産婦の方が経産婦より育児困難感が高い<sup>20)</sup>、末子の年齢が高いほど育児負担感が高くなる<sup>21)</sup>、複数の子どもを持つ親や子どもが2歳を過ぎた時に困難感が最も高かった<sup>22)</sup>など、相反した結果が出されている。国外では、父親の育児不安（Parenting Anxiety）、育児ストレス（Stress）、困難感（difficulty）、抑うつ（Depression）など、子育てに対するネガティブな感情や状況の調査が行われているが、健康な子どもを持つ父親のみを対象とした調査<sup>23,24)</sup>は少なく、育児不安の実態は十分解明されていない。

### 1) ハイリスク群の状況

各領域別のハイリスク群に該当した父親の人数は、領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ（育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」）、領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ（子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」）」、領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」、領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」の順で多かった。そのうち、領域Ⅰと領域Ⅱともに基準点を超過している「育児に対し

てハイリスク」な者が5名、領域Ⅲと領域Ⅳともに基準点を超過している「家庭内においてさまざまなトラブルが生じている可能性が高い」者が1名いた。領域Ⅰから領域Ⅳすべてにおいて基準点を超過しているものは子2人以上群に属している1名であった。本質問紙の利用手引きには、領域Ⅲと領域Ⅳの得点がハイリスクで育児困難感得点もハイリスクである場合には、子どもへの虐待に注意しながら面接等を慎重に行っていく必要がある<sup>11)</sup>と記している。今回は調査として無記名での回答のため、領域Ⅰから領域Ⅳすべてにおいて基準点を超過している1名への対応は困難であった。

2) 父親育児スクリーニングにおける育児不安の内容  
父親育児スクリーニング（子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版）は、育児不安の発生要因を評価することのできる質問紙である。

①領域Ⅰ「育児困難感タイプⅠ（育児への「自信のなさ・心配・困惑・父親としての不適格感」）」

父親育児スクリーニングの領域別にみた高得点項目は、領域Ⅰでは、「どのようにしつければよいかわからない」が48.3%であり、父親は、親になることへの役割としてしつけの必要性を感じている<sup>25)</sup>という報告からも、本調査対象者もそのような認識を持っていることが推察される。しつけとは、「礼儀作法を身につけさせること。また、身についた礼儀作法」<sup>26)</sup>である。ただ、本項目は、0歳児を持つ父親には今現在の段階では該当しない項目とも思われるが、今後を思って回答しているとも捉えられる。父親育児スクリーニングの調査対象範囲を0歳から7歳までとしているが、本項目に関しては再検討の余地があると考えられる。

子1人群中におけるハイリスク群は、領域Ⅰでは全員が「育児に自信が持てない」「子育てに困難を感じる」と回答し、育児に対する自己効力感が低い状況がみられた。幼児期の子どもを持つ母親を対象とした研究では、育児困難感の高群は、育児に対する自己効力感が低かった<sup>27)</sup>との結果にみられるように、母親の育児困難感、自己効力感と関係していることから、育児に対する自己効力感尺度<sup>28)</sup>や母乳育児継続の自己効力感尺度<sup>29)</sup>が作成されている。「育児に自信がある」親は少ないと思われ

るが、「育児に自信が持てない」「子育てに困難を感じる」と表明することで、支援につながることを期待されるため、父親育児スクリーニングは、面接という場において活用されることが好ましい。

②領域Ⅱ「育児困難感タイプⅡ（子どもへの「ネガティブな感情・攻撃・衝動性」）」

領域Ⅱでは、ハイリスク群全員が、「子どもは何で叱られているかわからないのに叱ってしまう」と子どもへの衝動性があることを回答していた。虐待のリスク要因の1つに、子どもへの衝動性や攻撃性<sup>30)</sup>という性格特性があることから、注意すべき項目と考える。

③領域Ⅲ「父親自身の不安・抑うつ状態」、領域Ⅳ「夫婦関係のあり方」

領域Ⅲでは、ハイリスク群全員が、「精神的に不調である」「不安や恐怖感におそわれる」「気が滅入る」と回答しており、領域Ⅳでは、「妻が落ち込んだ時に話し相手になり、話をよく聴いていない」と感じていた。生後1ヵ月の子どもを育てる母親の育児困難感に影響のある要因は、母親の不安・抑うつが最も関係があり、母親の不安・抑うつ傾向があると育児困難感を上昇させること、母親の不安・抑うつ傾向には、夫の心身不調、夫・父親・家族機能の問題、Difficult Baby が関係している。周産期における調査において、父親と母親双方に目を向けて、身体的精神的社会的側面から把握する必要がある。

児童虐待相談対応件数は年々増加しており、虐待の内容別件数では、心理的虐待が全体の59.2%と最も多く、ついで身体的虐待が24.4%<sup>31)</sup>となっている。また、心中以外の虐待死の分析では、「身体的虐待」が17人(29.8%)と多く、加害の動機では、「しつけのつもり」、「子どもの存在の拒否・否定」<sup>32)</sup>が多かった。本父親育児スクリーニングにおいても、領域Ⅰと領域Ⅱにおいて、この状況が把握できる。

### 3) 父親育児スクリーニング得点と対象者の背景との関連

父親育児スクリーニング得点と対象者の背景との関連では、ハイリスク群の方がそれ以外の群より「1日の平均家事時間が少ない」「1日の平均育児時間が少ない」「夫婦関係満足度が低い」と感じていた。育児をしたいとい

う父親が増加傾向にある中、長時間労働や職場での役割責任が高くなる年代であることから、本調査対象者はさまざまな葛藤を抱えているのではないかと推察される。育児を行う父親の心理的体験を捉える研究<sup>33)</sup>が必要である。

本調査では、父親育児スクリーニング（子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版）を用いて測定したが、他に、父親に特化した尺度が見られず、父親育児を身体的精神的社会的側面から測定できる尺度が求められる。

### 3. 研究の限界

育児をする父親の現状は、まだ十分明らかにされていない。社会環境が激変する中において、父親の心理的体験を把握することは、家族の調和を図る上で重要なことである。本調査では、父親を対象としたため、父親育児に影響する要因を一方向からしか把握できていない。周産期を含めて子育てにおける調査では、父親と母親双方に目を向けて、身体的精神的社会的側面から把握する必要がある。

### 謝 辞

本研究にご協力いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

本研究は、2016年度徳島大学大学院保健科学教育部博士前期課程修士論文に加筆・修正したものである。

### 文 献

- 1) 内閣府男女共同参画局「平成28年社会生活基本調査」の結果から ～男性の育児・家事関連時間～  
2016  
[http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k\\_42/pdf/sl-2.pdf](http://www.cao.go.jp/wlb/government/top/hyouka/k_42/pdf/sl-2.pdf)
- 2) OECD. Statistics.  
[https://stats.oecd.org/Index.aspx?datasetcode=TIME\\_USE](https://stats.oecd.org/Index.aspx?datasetcode=TIME_USE)

- 3) 厚生労働省「健やか親子21 (第2次)」の中間評価等に関する検討会報告書 2019  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11901000/000614300.pdf>
- 4) 厚生労働省「健やか親子21」最終評価報告書 2013  
<http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/pdf/saisyuuhyouka2.pdf>
- 5) Escriba-Aguir, V., Artazcoz, L.: Gender differences in postpartum depression: a longitudinal cohort study. *J epidemiol community health*, **65**: 320-326, 2011
- 6) Ramchandani, P., Stein, A., Evans, J., O'Connor, T. G.: Paternal depression in the postnatal period and child development: a prospective population study. *Lancet*, **365**: 2201-2205, 2005
- 7) 厚生労働省 令和元年度福祉行政報告例  
[https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/19/dl/kekka\\_gaiyo.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/gyousei/19/dl/kekka_gaiyo.pdf)
- 8) 厚生労働省 子ども虐待対応の手引き  
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dv12/02.html>
- 9) Norton, R.: Measuring marital quality: A critical look at the dependent variable. *Journal of Marriage and the Family*, **45**: 141-151, 1983
- 10) 諸井克英: 家庭内労働の分担における衡平性の知覚. *家族心理学研究*, **10**: 15-30, 1998
- 11) 安藤朗子, 平岡雪雄, 武島春乃, 川井尚 他: 父親の育児不安に関する基礎的研究Ⅴ—子ども総研式・父親育児支援質問紙スクリーニング版の利用手引きの作成—. *日本子ども家庭総合研究所紀要*, **48**: 1-10, 2011
- 12) 厚生労働省 働く女性の実情 2019  
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/19-01.pdf>
- 13) 男女共同参画局 男女共同参画に関する世論調査 2019  
[https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2019/201912/201912\\_02.html](https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2019/201912/201912_02.html)
- 14) 厚生労働省 令和元年版過労死等防止対策白書 2019  
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/karoushi/19/dl/19-1-1.pdf>
- 15) 竹田省: 妊産婦死亡原因としての自殺とその予防—産後うつを含めて. *臨婦産*, **71**: 506-510, 2017
- 16) Tokumitsu, K., Sugawara, N., Maruo, K., Suzuki, T., *et al.*: Prevalence of perinatal depression among Japanese men: a meta-analysis. *Ann Gen Psychiatry*, **19**: 65, 2020
- 17) 瀧本千紗, 室津史子, 濱耕子: 子育て中の夫の精神援助行動の特性と夫婦関係満足度の関連. *愛媛県立医療技術大学紀要*, **16**: 11-18, 2019
- 18) ベネッセ次世代育成研究室 第1回 妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査(妊娠期~2歳児期).  
[https://berd.benesse.jp/up\\_images/research/research20\\_report1.pdf](https://berd.benesse.jp/up_images/research/research20_report1.pdf)
- 19) 山口忍, 丸井英二, 齊藤進, 荒賀直子: 1歳児をもつ母親の育児困難感. *順天堂医学*, **53**: 468-476, 2007
- 20) 神崎光子: 産後1ヵ月の母親の育児困難感とその他の育児上の問題, 家族機能との因果的関連. *女性心身医学*, **19**: 176-188, 2014
- 21) 荒牧美佐子, 無藤隆: 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要員の違い: 未就学児を持つ母親を対象に. *発達心理学研究*, **19**: 87-97, 2008
- 22) O'Brein, M.: Child-rearing difficulties reported by parents of infants and toddlers. *Journal of pediatric psychology*, **21**: 433-446, 1996
- 23) 清水嘉子: 父親の育児ストレスの実態に関する研究. *小児保健研究*, **65**: 26-34, 2006
- 24) 岩田裕子, 森恵美, 前原澄子: 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因. *日本看護科学会誌*, **18**: 21-36, 1998
- 25) 田中恵子: 初めての子どもをもつ両親の子どもへの思いに関する質的研究. *母性衛生*, **55**: 182-189, 2014
- 26) 新村出: 広辞苑. 第6版, 岩波書店, 東京, 2007
- 27) 村井博子, 流郷千幸: 幼児期後期の子どもをもつ母親の育児困難感と育児に対する自己効力感, ソーシャルサポートの関連. *聖泉看護学研究*, **9**: 27-34, 2020

- 28) 金岡緑：育児に対する自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究, 70 : 27-38, 2011
- 29) 中田かおり：日本語版母乳育児継続の自己効力感尺度の開発と信頼性・妥当性の検討. 日本助産学会誌, 29 : 262-271, 2015
- 30) 笹川宏樹：児童虐待の現状とリスク要因. 心理臨床科学, 9 : 31-38, 2019
- 31) 厚生労働省 児童相談所での児童虐待相談対応件数 2020  
<https://www.mhlw.go.jp/content/000824359.pdf>
- 32) 厚生労働省 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について 社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会 第17次報告  
<https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000825392.pdf>
- 33) Baldwin, S., Malone, M., Sandall, J., Bick, D.: A qualitative exploratory study of UK first-time fathers' experiences, mental health and wellbeing needs during their transition to fatherhood. *BMJ open.*, 9 : e030792, 2019

## *The actual situation and the search of background factors on anxiety of child-rearing fathers*

*Saho Hino<sup>1)</sup>, Mari Haku<sup>2)</sup>, and Aya Kondou<sup>2)</sup>*

<sup>1)</sup>*Ehime Prefectural Central Hospital, Ehime, Japan*

<sup>2)</sup>*Tokushima University Graduate School of Biomedical Sciences, Tokushima, Japan*

### SUMMARY

The study aims to investigate the actual situation and the search of background factors on anxiety of child-rearing fathers. Eighty seven fathers rearing children over one month were assessed, using Father's Scale for the Screening Version, the quality of marriage index, and questionnaire created by the researchers. The results of the average score on subscales 1 "difficulties of child-rearing, type 1" was 10.2, subscale 2 "difficulties of child-rearing, type 2" 6.5, subscale 3 "feelings of anxiety or depression" 7.0, and subscale 4 "the marital relationship" 8.9 in Father's Scale for the Screening Version. The high-risk group of subscale 1 was 17.2%, subscale 2 8.0%, subscale 3 4.6%, and subscale 4 6.9%. On background factors for child-rearing anxiety of fathers, fathers of high-risk group had a short time of housework and child-rearing, and lower marital relationship. The situation of child-rearing fathers has not been clarified, and there is no scale specialized for child-rearing fathers. Therefore, we need the scale of child-rearing father on physical, mental and social aspect.

Key words : Child-rearing father, anxiety, background factors